天龍いくえ不明

クレマ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

憑依系オリ主をボコボコにする為の小説です。

本作の主人公に主人公補正はあんまりないです。

興が乗ったら続きます。

目　次

憑依イッセーが主人公補正で勝つ1話　1
オリ主が原作と世界の乖離に苦しむ二話　23
流点転換。未知に進む三話　56

憑依イッセーが主人公補正で勝つ1話

俺は、まあ。いわゆるところの転生オリ主だ。

転生先はハイスクールD×Dの世界の、それもまさかの主人公様。

おっぱいドラゴン、兵藤一誠その人である。

特に死んだという記憶はないのだが、なんか気がついたらそんなことになっていた。

神様っぽいお方に会った事もなければなんらかのチートを持っているわけでもない。

とはいえ、俺の記憶が――ハイスクールD×Dという物語が正しければ、この身体には二天龍の片割れたるドライグの魂を宿した神器、使用者の能力を十秒ごとに倍化させるというこの世界でもトップクラスのチート武器が備わっているはず、なのだが――

「でねえ……」

苦節十六年、イメージトレーニングだったり動きを伴ってみたりと多彩な方法でそれを出現させようとしたが、さっぱり出ない。便秘だったら腹が破裂してるぞこれ。

「くそっ……もう猶予がないぞ……」

そしてこの世界、なんだかんだ言ってめちゃくちゃ危険である。

ラノベでは割とギャグテイストが強かったからサラッと流されているが、一巻の序盤

で主人公が物理的に死んでいるのだ。かの上条さんもビックリである。
聖書の神とやらがはた迷惑にも神器なんて作ってくれたせいで、それを狙って堕天使やら悪魔やらがマンハントよろしく人間を拉致ったりぶっ殺したりしてるのだ。
悪魔共はどうやら自己研鑽をしたがらないそうなので戦力の強化を神器にまかせているようだし、堕天使勢はどうだか知らないが、まあ悪魔勢とどっこいどっこいの力関係だから似た様なものであろう。
天使勢にはそういう描写こそ無かったが、聖剣関係で結構もにょもにょやっていたし、それ以外は清廉潔白であるとは考えづらい。
まあたしかにその辺の一般人が大量破壊兵器を持っているかもしれないとかだったら放置しておけるわけもないだろうが、被害者からすればたまったものではない。
どういうわけかは知らないが、堕天使はただ持っているだけで神器を探知してくるので〝関わらなければ〟とか〝使わなければ〟とかでは隠れられない。割と三下設定のレイナーレですら見つけられるのだからどの堕天使も似た様なものと思われる。進撃の巨人かお前らは。
まあそんなわけで、もしも俺が神器を持っていた場合はまず間違いなく物語に巻き込まれる。
もしくは物語に巻き込まれなかったとしても死ぬ。

なので、せめても神器には目覚めておきたい。自衛のために。

「だから来いや天龍ぅぅぅぅッ！」

「うるっさいわね朝っぱらからこの子は！　さっさと学校行きなさい！」

今生でのお袋殿に怒られたので学校に。――されど進展は無く。

――

「よぉイッセー！　今日も元気に厨二病やってるか!?」

学校の教室に着いてすぐに友人から声をかけられる。

松田である。

原作においては「エロ坊主」やら「セクハラパパラッチ」やら言われているがこの世界においてもそのとおりである。

また、どうも俺が知っている限りではあるが、この世界は今の所、俺をのぞいてはハイスクールD×Dの流れを遵守している。

グレモリーさんと姫島さんは二大お姉様と呼ばれているし、木場君はイケメン王子だし、塔城さんはマスコットだし、支取さんは生徒会長である。あと幼い頃しか知らないが紫藤さんは男にしか見えなかった。設定で女の子だと分かっているのにである。騙

し絵か何かかあいつは。

――ともかく、ここまで合っていてはもはやハイスクールＤ×Ｄを疑えない。やばい！　絶対にやばい！

あと勘違いしないでほしいのだが、俺は厨二病ではない。

いつまで経っても神器が目覚めてくれないので、流石に焦った俺はその〝呼び出し〟を学校でもやっていたら、いつの間にかそう呼ばれるようになっていただけなのだ。

ちょっと休み時間とかに「右腕が疼くぜ……！」とか「光に向かって一歩でも進もうとしている限り人間の魂が真に敗（ｒｙ」とか「お前は人の力を増幅するマシーンなんだ。お前はその為に作られ（ｒｙ」とかやっていただけなのだ。だけど……なぜ？（バイド並感）

なお、この世界では前世の世界のネタのほとんどが通用しないので、オタク扱いこそされないが、言ってる事はアレなので普通にアレである。（オブラート）

「おう、お前は今日も元気だな松田。オープンスケベもムッツリならまだ可能性感じられたかもしれないのにな」

「だれが可能性ゼロだ！」

「小数点以下は切り捨てられてるから実際には小数点以下の確立で女の子のハートを盗めるぞ」

「ガセネタじゃねーか！」
等と、他愛も無い言葉の応酬を繰り返しつつ、席に着く。
……だが何か物足りない。
そうだ、俺たちは三人組のバカトリオじゃなかったのか。もう一人は何所に行った。
「そういや、元浜はどうした？　俺結構始業ギリギリに来たはずなんだけど……まだ来てないのか？」
教室を見回してみるも慣れ親しんだメガネの姿は見えない。
どうしたんだろうかあのロリコン。
「さあ……どうしたんだろうな。俺の所に連絡は来てないけど、イッセーはどうだ？」
そう返されて、そう言えばまだ自分はメールをチェックしてない事を思い出した。
が、ざっと見る限り目当てのメールは来ていないようだ。電話が来てたならさすがに気付くし。
「だめだ。なんもねえな――っと、お？」
その時ガラリ、と教室のドアがスライドする。
すわ先生が来たかと思ったが、どうもそうではないようだ。
「なんだ……？」
妙にざわついたクラスの面々を疑問に思いながら開いたドアの方を見ると。

（――――!?）

そこにはなんと、妙に満ち足りた様子の元浜が！

（誰だお前!?）

なんか、もう、お前悟りでも開いたの？　ってくらい穏やかな表情をしているが、こいつは元浜である。忘れてはいけない。

エロメガネとまで呼ばれるこいつのことだ、どうせどうしようもなくどうでもいい事に決まっている。エロメガネのこと元浜って言うのやめろよ！

「よ、よう……元浜。なんだ、仏門でも叩いたのか？　今日はなんというか――」

「――世界は美しい」

「誰だお前!?」

なんか変な事言い出したぞ誰だお前。

だが尋常ではないこの様子……まさか、こいつ本当に悟りを……!?

そう考えると何か元浜が聖なるオーラを纏っているように見えて来た。

いや待て落ち着け元浜だぞこいつは。仮にオーラを出しているとしてもそれは一文字違いの性なるオーラだ。そうに違いない。

「どうしたんだ元浜……？　今までとはまるで別人だぞ、悪い意味で。俺これから世界は美しいなんて言う奴とどうやって接していけばいいかわかんねえよ……」

「いや、実は昨日素晴らしいＤＶＤを手に入れてな。それで一晩盛り上がってたらもう朝には賢者モードよ」

悟りもオーラも無いんだよ！（やさぐるま）

……まあ、少し安心したが。

というか、それよりも現状教室中の女子達からまるで生ゴミを見るかのようなドＭ垂涎の冷たい視線が元浜に集中しているわけだが、こいつこれから大丈夫なんだろうか。

「――っと、チャイムだ」

「おお、そういや一限目なんだっけか」

始業のベルが鳴り、時間は進む。――わずかな焦燥を足跡に。

――

放課後のことだった。

告られた。

告白された。

――ファッ!?

「ま、待て、待つんだ俺……！　俺がモテるなんてあっていいのか俺……!?」

告白してきたのは長く伸ばした綺麗な黒髪が印象的な美少女、天野夕麻さん。
しかし、ハイスクールＤ×Ｄにおいてそれは偽名であり、その正体は堕天使。
兵藤一誠第一の死亡フラグ、レイナーレさんである。
「あの……？」
「あ、いや、すみませんなんか、俺告白されたの初めてで……」
しかし俺、なんだかんだ言って実は冷静である。
そう、冷静なのだ。
膝がガタガタ震えているのも、決して女の子と一対一で向かい合ったことが前世含めて今回が初めてだからビビっているわけではなく、あくまで演技なのだ。
前世においても年齢＝童貞歴であり、常からヤりたいヤりたいと思いつつも風俗に行く度胸もないビビりゆえでは断じてない。断じてない。（重要）
ああでもなんなんだよこの子唇ぷるっぷるじゃねえかよおっぱいデカいしやわらかそうだし腰エロすぎだろくびれってここまで興奮するものだったのかようなじ舐め回したい！
脳内では絶賛童貞こじらせ中なのだが、しかしここで思い出されるのがハイスクールＤ×Ｄである。
このまま進むとハートをブチ抜くゾ（物理）されてしまうのだ。

お手てつないで山歩きしたいくらい可愛い彼女だが、残念なことに俺は命の方が可愛いのだ。

まあ、要するに。

――ちくしょう往ねや原作ゥ！

である。

その後、銃を突きつけられながら「君は知りすぎたんだよ……」とか言われるモブキャラのような心境で断る事にした。

――――

その場に立ち尽くしていた。

あの後、「（気持ちは嬉しいけど流石に初対面の人とイチャイチャできる程トークスキルも甲斐性も持ち合わせて）ないです」と出来る限り丁寧にお断り申し上げたら「で、ですよね！　流石に唐突すぎましたよね！　あは、ははは……」と顔を赤くして去って行った。

恥をかかせてしまったようで申し訳ない。

しかしあの時は近くに他の人も居なかったし、彼女の傷もそこまで深くはならないは

ず。

俺も誰かにこの事を言いふらしたりなどしないため、雪女的な時間差殺法をかましにくる事は無いと思う。――そういえばこの世界の雪女ってイエティなんだっけ？　ゴリラに言い寄られるなんて笑い話にもなんねえよ。

「ああー……あんな娘から話しかけられる機会なんてもう二度とこねえよぉ……」

それにしても俺、未練タラタラである。

自分の意思で断っておいて女々しいと思うし我ながら恥ずかしいが、それでもえらい美少女だった。

まあ悪魔や堕天使というのは人を堕落させるのが生業みたいなものなのだし、そのためには人に受け入れられる必要があるのだから基本美しいのは当然なのかもしれない。

「……つーか、今日だったのか」

半ば呆然としながら呟いた。

原作の開始。

現実感が湧かない。

実感が追いつかない。

自分の知識を信じたくない。

原作なんてバカな妄想で、堕天使レイナーレなんて存在しなくて、天野夕麻という名

前は偽名でもなんでもなくて、俺はただのデタラメに振り回されて女の子の真剣な想いを蹴っちまった大馬鹿野郎。
そうだったらどんなに良いか。
「……もしもそうだったら、少なくとも俺は槍に刺されて殺されたりはしない」
――こんな時まで何を考えてんだよ、真性のクズ野郎が。
どうか、あの女の子が悲しんでいますように、なんて。
日が暮れてきた。――今日は、人の多い道で帰ろう。

いくつかの夜が明け、そして暮れてゆく。
まだ俺は生きていられたようだ。
あれからいくつか、準備をしてみた。
まず、折りたたみ式の警棒のようなもの。
正直のところ役に立つとは思えないが、まあ一応持っておく事にした。
次に、血糊袋。
なんとなく血っぽい液体をチャック付きのビニール袋に入れただけの物だ。

ようするに相手は神器持ちを排除、殺したいだけであって、別に俺の身体に用があるわけではないのだから、うまくすれば死んだふりが効くかもしれないのだ。

最後に、チラシ。

そう、原作主人公が悪魔になる形で復活するためのファクター。悪魔を召喚するためのチラシである。

たしかあれは煩悩を持つ人間にしか配ってくれないそうなのだが、まあ煩悩なんて誰でも持っているものだし、仏教的には死への恐れ、生への執着すら煩悩扱いされるので、まさか俺には配られないなんてことは起こるまい。

しかし、これはあくまで下策であると言わざるをえない。

そもそも死にたくない俺は死なない為の方法を探すべきであり、死んでも蘇るための方法に頼るのは間違いなのだ。

（とは言え、次善策があると安心出来るしな……）

否。次善策ではない、ただの妥協案だ。

戦っても勝てない。俺の命を狙う者はそういう存在だ。なら、負けた時の被害を少しでも減らす事に全力を傾けるべきだ。

究極的には戦わないことこそが最善なのだろうが……

――どうやら無理そうだ。

「なあ、天野さん。とりあえず命乞いをさせてほしい」

「無理ね」

背後に堕天使がいた。

右も左も前も、逃げようとすると、その行き先に光の槍を投じられる。ちょっと強すぎやしませんかね。

こちらに流れてくる、夕日に映し出された影を見るに、おそらく浮かんで——翼で飛んでいるのだろう。

つまり、おそらくはあのナイスバディがボンテージ姿に……！　ぜひとも拝ませてもらいたいが振り向いた瞬間殺される様な気がする。

というか、何故気付けなかったのか。そもそもレイナーレは人間を下等なものとして見下している。そんな彼女が人間に告白し、そしてフられる。——末代までの恥（比喩）である。

じゃあなんで告白なんかしたんだ。とも思うが、まあ、何かの気まぐれだったのだろう。モテない男に最期くらい良い思いさせてやろうという上から目線の慈悲とか、単に人間を誑かして絶望を味わわせてやろうとか。

告白を受けても死ぬ、断っても死ぬ。フェストゥムか何かかよ。

「……思ったより冷静なのね」

「どうだろう。現実感が湧かないだけかもしれない。ほら、こんなファンタジックな武器を向けられてもさ」

嘘だ。

正直なところめちゃくちゃ怖い。

下手したら苦しみながら死ぬ事になるし、運が良ければ一瞬で死ねる。うまく行けば苦しみながら生き残れる。うまくいっても苦しいのである。死んだように見せかけなければならないのだから。

もう神器を発現させるのは諦めているし。

――しかし。

「でも、だからこそこうして、抵抗しようと思えるのかもしれない。ヒロイックな気分で。俺はほら、厨二病だからさ！」

言うと同時、懐から警棒を引き抜き、目の前に突き立つ光の槍に思い切り叩き付ける。

先ほど、話しながら俺は光の槍に触れたりなどしていたが、特に痛みなどもなかったからだ。

てっきりライトセーバー的な、高熱による溶断を行う攻撃かと思っていたのだが、そうでもないらしい。

特殊な追加ダメージが発生するのは悪魔に対してだけで、それ以外には単純な質量兵

器として機能するようだ。つららを投げつけられているようなものか。
「ただ諦めてるだけかと思ったんだけど、現実が見えてないのね。……気に入らない」
警棒を叩き付けられた光の槍に、特に変化はなかった。
折れも曲がりもしない。だが、グラつく。堅いアスファルトの地面から引き抜けるようになる。
持ってみると非常に軽いそれを手に取って、そのまま逃げるように走り出す。
駒王学園に向かう。
そこに行けば悪魔が居るはずで、そこに行けば多分助かるはず。
幸い現在地からそんなに離れていない。せいぜい、走って五分程度か。
――生き残れるだろうか。
「――死にたくねえ……っ！」

それから、走って、走って、走って。
「で、結局は駄目だったわね」
ペース配分ガン無視、命がけの全力疾走。それでも、学園にはたどり着けなかった。

相手の方が圧倒的に速いのだ。少しの間は逃げ回れていたのだが、すぐに先回りされてしまった。

投げた学生鞄は切り裂かれた。

一か八かの接近戦も無意味に終わった。

光の槍は手の中で消えた。もともとレイナーレの力なのだから当然の事だったのかもしれない。

警棒はへし折れた。所詮安物だったのだ。仕方ない。

「いや、どうかな。もしかしたら逆転の一手を隠しているかもしれないぜ？」

――なに減らず口たたいてんだろう、俺は。

学校はここからすぐそこで、曲がり角を二つ曲がればもうそこが駒王学園だ。

が、そのあと二つを曲がれない。

体力の残りを考えない全力疾走に命の危機という恐怖も相まって、息はもう上がり切っているし、それがなくてももう、眼と鼻の先に光の槍が突きつけられているのだ。

一歩でも動いたら死ぬ、ではなく、一歩動く事も出来ずに死ぬ、というのが現状だった。

……ひょっとしたら、土下座して下僕にでもなんでもなるからと命乞いをしたほうが建設的なんじゃないか。

――だってのに、なんだって俺はこんな相手を挑発するような事を……。
もしかして俺には実はええかっこしいなところがあったのかもしれない。
死を恐れずに立ち向かう的な感じで、漫画の主人公のような――
「じゃ、見せて見なさい」
「ギぃっーー!?」
左肩を光の槍がつらぬいた。
痛みよりも先に、灼熱を感じた。
「い、あああああああッ!?」
「結界を張ってるから、いくら叫んでもいいわよ」
そういう問題じゃねえよ、と心の中で悪態をつけたのは、肩から光の槍が引き抜かれ、激痛に地面をのたうちまわっている時だった。
右手を傷に当てるが、槍は貫通している。片方から圧迫するだけではもう片方から血が流れるだけで変わらない。
動脈を傷付けられてしまったのか、血がどばどば出てくる。
「つぅ、ああ、くそ、血が――うぁ……っ!」
無理だ。
漫画の主人公みたいになんて無理だ。

こんな、死ぬような痛みに耐えて立ち向かうなんて無理だ。
そもそも考えてみれば俺は、箪笥の角に小指ぶつけた時のあの一瞬の痛みだけでだけで立ってられないくらいなのに、こんな痛みに耐えるなんて無理だ。
ましてや、ただ死にたくないってだけの、薄っぺらな気持ちでは。
「非日常に出会って浮かれちゃった？　自分が特別だとでも思っちゃった？　まあ、確かに特別よね。――特別、運が無い」
「っつ、く……来るんじゃねえよ、ちくしょうが……！」
ゴミでも見るかのような冷たい眼で、俺を見下ろすレイナーレ。
ようやく分かった、こいつは人間じゃない。
種族の壁とか、翼の有無とか、能力の差とか、そういう話しじゃない。
言葉を交わせて、意思を通わせられる相手を殺すことになんとも思わない、その精神性の事だ。
冷酷で傲慢で、寿命が長くて狡猾で、その上で人より遥かに強い。そんな怪物に、俺が勝てるわけが無い。
自らの力に驕っているとか、相手の脆弱に油断しているとか。
そんなの、何の力も無い俺には、何のハンデにもならないのに。
「に、逃げなきゃ……！」

「逃げられるの？」
最早レイナーレの言葉など聞こえない。
恐怖にこわばって足が言う事を聞かない。左腕は肩をやられて動かせず、唯一まともな右腕を使って地面を這う。
「今のアナタ結構好感持てるわよ？　ナメクジみたいで無様で！」
――おっしゃる通りだ、クソッタレ。
血を流しすぎたからか、何だか寒気がする。
目も霞んで来て、肩の傷から痛みが薄れていく。
良い兆候の訳が無い。俺は今、死の淵に立っているのだ。
「……でも、もう飽きたわね。死んじゃう前に、殺してしまいましょうか」
霞む視界の隅。レイナーレの手に、光が収束して槍を形作る。
凶器を、作り上げる。
「ひっ……!?」
もうプライドも尊厳もあったもんじゃない。
言葉にもならない変なうめき声のようなものを洩らしながら、必死になって逃げ出し

「あばっ、ごぅぇッ!?」

横合いからの蹴撃に吹き飛ばされる。
人外の脚力による、腹部への強烈なサッカーボールキックだった。
「うっぶ、うおえ……！」
蹴り飛ばされ、ゴロゴロと転がっていった先。口の中、喉の奥からゴボリと苦みと酸っぱさの混じった液体がこみ上げてくる。
これまでに味わった事の無い吐き気と激痛に、もはや思考すらままならない。
半狂乱のまま恐怖に駆られて地面を這うが――。
「手伝ってあげましょうか！」
再度蹴り飛ばされる。
「……ッ！」
もはや声すらでない。
恐怖で声が出ないとか、そういうのではなくて単純に、肺に空気が無くて声帯を振るわせることができなかったのだ。
ただ、口の中の酸っぱさと苦みに、鉄の味が加わるだけで。
「ひ、ヒュッ――！」
「え？　もう一回？」
「ちが、やべて……ッ！」

ごちゃっ、と。
水気のある音がした。
今回はあまり転がらず、せいぜいがうつ伏せだった体勢が仰向けになる程度だった。
「あら、血がついちゃった。落とすの面倒なのよね、これ」
血が付いた、なぜ？
レイナーレが蹴ったのは俺の腹で、血が出ているのは肩だ。
手で肩を抑えているので血は背中に流れるはず。
が、気付いてしまった。
腹が、破けている。
「あァ」
ただただ恐ろしかった。
「あああああああああああああああああああああああああ!?」
その恐怖を遠ざけようとやたらめったらに右手を振り回す。
今まで左肩の穴を抑えていて血まみれの右手は振るわれるたびにその血を撒き散らし、いつの間にか持っていた簡素な直剣でレイナーレの頚を切り落とした。
「え？」
おそらく、レイナーレにも何が起きたのかわからなかったろう。

当然だ、俺にだって何が何だか分からないんだから。
というか、単純に頭が回らない。血を流しすぎたのだ。
目の前では黒髪の女が一瞬で火葬されたかのように乾き黒ずみ灰となって白い骨を残し、その骨すら朽ち果ててゆく。
その光景の意味すら理解が及ばず。
本格的にぼやけてゆく視界のなかに、綺麗な金色が見えた気がした。

オリ主が原作と世界の乖離に苦しむ二話

深い暗がりから、明るみに這い出るような。
生暖かい水飴の中をかき分けて進むような。
まどろみから浮上して、意識が熾り燃え上がり――。
目を開く。
「あっ、よかった。……大丈夫ですか？」
「……はい？」
明るい日差しの中。
硬い地面の上で。
目が覚めたら、金髪の美少女に顔を覗き込まれていた。
というか、膝枕されていた。
――ファッ!?
さて、何を言っているのかわからないと思うが……いや、ほんとどういう事なんだコレ？
目が覚めたとは言え、いまいちまだ頭がぼーっとする。

具体的には何故外で目覚めるのかが思い出せない。
そもそもこの人は一体誰なんだ……？
「痛っ……！」
いつまでも膝枕されたままにはいかないので、（若干名残惜しみながら）身を起こす為に地面に手を突くと、突然肩に引き攣るような痛みを覚える。
反射的に手を当てると、何となく手触りに違和感。見れば、まるで穴が空いたかのように服が破れている。
「何だこれ……？」
「日本は治安が良いと聞いていたのですが……酷い怪我をされていました」
「――――――っ」
転がるように少女から距離を取る。――いや、実際の所その必要は全く無いのだが、今の俺は「他人」というものを酷く恐れていた。
「あんたは……」
ぼやけた昨日を思い出した。
痛みと恐怖、そして絶望と――剣。
夕方に受けた、到底助かるとは思えなかった怪我が既に跡形も残っていない。
名残のように肩が痛むが、それだけだ。

自分の神器は、剣を出現させた。とても、怪我を治すような機能があるとは思えない。

なら、この少女は、おそらくは――。

「あっ、申し遅れました。私、本日この町の教会に赴任してくることになりました、アーシア・アルジェントです」

アーシア・アルジェント。

ハイスクールD×Dにおいては悪魔を助けたことで教会から追放された、治癒の力を持つ神器を宿す元聖女。

細かい日時は不明だが、おそらくは数日中に命を落とすことになる、ただの人間。

「アーシアさんか。俺は兵――」

名乗ろうとして、口を噤む。

いや、待て。もしも堕天使レイナーレが俺の事を仲間に話していた場合、これから廃教会に赴くアーシアの口から俺の名前がでるのは不味い。

もしもレイナーレが「たかが人間の分際でこの私をフッた兵藤一誠とかいうアホをブッ殺してくるわ」とか言っていた場合、アーシアに兵藤一誠という男が救われたという情報は俺にとって非常に不都合だ。

しかし、原作では確かドーナシークとかいう堕天使が兵藤一誠の顔を知らないような口ぶりだった。

ならば。
「ひょう?」
「……ああ、兵部京介だ。キョースケでいいぜ」
偽名。
心優しいシスターさんに嘘を吐くのは少々良心が痛むが、ここには兵藤一誠なんて男はいなかった。――そういう事にしなければ、せっかく助かった命が無駄になる。
アンリミテッドな名前になってしまったのはご愛嬌だ。兵、から続く適当な名前が思いつかなかったのだ。
「実はでっかいナイフ持った大男に襲われてさ。死ぬかと思ったけど、いや、助かったよ。ありがとう」
そうだ。レイナーレもここにはいなかったということにする。
通り魔に襲われて重傷を負った俺は幸運なことに偶然通りがかったアーシアに救われた。
レイナーレも兵藤一誠も、なんの関わりも持たない。
そういう事にしよう。
「――そうでしたか。これもきっと、主のお導きですね」
神様。

聖書の神。
聖四文字。
この世界において、それは遥か昔に失われた存在だ。
聖書という神話、天使と堕天使と悪魔の三つ巴の大戦。大きい目で見れば内輪揉めの仲間割れだが、その戦いにて、四人の魔王達とともに滅びている。
現在ではその名残ともいうべき体系化された奇跡、「神のシステム」を天使長ミカエルが維持しており――とにかく、既に「神様のお導き」なんてものはただの幻想で。
故に、彼女の祈りは最早見当はずれだ。
――でも。
（神様を信じたい気持ちは、俺も分かるよ）
俺は彼女の神器によって死の淵から救い上げられた。
神器とは神のシステムによって運営されており、神のシステムは信徒の信仰を束ねることによって構築されている。
ならばきっと、俺を救ったのは彼女と、彼女の祈りだ。
そんな彼女の信じるものなら、俺も信じてみようかな、と。
「ああ、神様様々だな！　俺もちょっと入信してみたくなったぜ」
これは、そういう軽い気持ちで口にした言葉だった。

すると。

「なら、どうぞ」

そう言って、首に掛けていた十字架の付いたネックレスを手渡して来たのだ。

「いや、受け取れねえってそんなの！　それってあれだろ、結構大事なものだろ？」

俺の知識が正しければ、この十字架の付いたネックレスはロザリオと呼ばれるものだ。

いや、ロザリオには数珠のような珠が付いているはずだし、そもそも首に掛けるものではないらしいからこれはまた違う物なのかもしれないが、それでも信仰の証には違いない。

大工にとっての金槌のように、料理人にとっての包丁のように、書道家にとっての筆のように、無くてはならないものであるに違いない。

布教を行う宣教師ならともかく、教会から追放され、行く宛を無くして堕天使に引き取られた彼女が、誰かに譲り渡せるものを持っているわけが無いのだ。

「いえ、いいんです。もう危ない事の無いようにって、神様のご加護を祈るお守りです！」

無い。の、だが……。

「……そう言われると、遠慮しづらいな」

しかし、純粋な親切心からの贈り物となると話は別だ。利害とか損得とかそういったものの一切を無視した、ただ善かれと思っての行動には、有無を言わせぬ熱量がある。

「もしかして、押し付けがましかったですか……？」

「いや！　別に、そういうわけじゃないんだ。……うん、ありがたく頂くよ」

まあ、決して迷惑なわけでは無いし、善意を拒絶するのはガキっぽい気がするので受け取ることにする。

手渡されたネックレスを早速首に掛けると、若干申し訳なさそうだったアーシアさんの表情がぱあっと明るくなった。

（うん、やっぱり女の子には笑顔がにあ――）

「ところでキョースケさん」

「あ、はい」

美少女の顔がほころぶのにちょっとほんわかしていると声がかけられる。

そういえば、彼女は確か廃教会に行きたいが、道が分からなくて困っている、という設定だったはずだ。

廃教会……堕天使の巣窟。俺を殺しかけた怪物と、その信奉者たるはぐれ神父達のテリトリー。

――寒気がした。

の、だが。

「――ううん。やっぱり、なんでもありません」

拍子抜けだった。

「見た所、もう大丈夫なようですし、私はここで失礼させていただきますね」

「あ、ああ……気を付けてな。物騒だし」

てっきり、教会まで案内してください的なお願いをされるのかと思ったが――というか実際、原作では道に迷っているところを主人公に送ってもらうはずだったのだが、一体どういう事なのか。

主人公である俺が生存していることから――否、物語の始まりの日にレイナーレをフッた時からハイスクールD×Dはすでに俺の知っているものとは変わっている。

現に俺の神器は赤龍帝の篭手ではなかったし、俺の評価はエロ三人集の筆頭ではなく中二病だ。

しかし、駒王学園にはオカルト部が存在し、堕天使レイナーレは俺を狙い、そして元聖女アーシアはこの町に来た。いくらバタフライエフェクトが起きたとしても、外国まで変化を起こせるとは思えない。

なので、元々地図を用意しているとか、堕天使達やはぐれ神父達に案内をもらっているとか、前もっての準備が必要になる理由は除外できる。その上で考えられるのは他の

誰か、英語の話せる者に道を教えてもらっているとか――。
はて。
去って行く、日本語を話せないハズのアーシアを見ながら疑問が一つ。
――俺は何故アーシアと会話できたんだ？

――

閉じ切った部屋の中。
カーテンまで閉めた、暗がりの安全圏（テリトリー）。
「イッセー……本当に晩ご飯要らないの？」
「……ああ。なんか、食欲湧かねえわ」
ベッドの上に踞って、食事さえ断って――ようするに、引きこもりと化していた。
アーシアと別れるまではなんと言うか、美少女とのおしゃべりにメンタルセラピー的な効果があったのか、割と精神的に落ち着いていたのだが、そこから別れて家に帰る頃にはすっかり心的外傷（トラウマ）を拗らせてしまっていた。
明確に自分の力で勝利（死地を乗り越えた）したという感覚（セイクリッドギア）があったならこんな風にはなっていなかったのだろうが、残念な事にあの時はぶんぶん振り回していた手の中に突如剣が出現しただ

けという、振り返ってみれば間抜けなものだった。我侭なようだが、これでは勝利の実感には程遠い。

――死と痛みの恐怖に打ち勝つには、あまりにも程遠い。

とは言え、まあ一般人が怪物（堕天使）に襲われた結果としては命を失う事も無く、怪我の一つも残らないとなればむしろ上々と言えよう。

と。

理屈の上で客観視すればリザルトでSランク待った無しな結末なのだが、それで終わりにならないのが人生と言うヤツだ。

具体的には学校だ。

俺が堕天使レイナーレに襲われたのは金曜日のことだったので、そこから一晩気を失って土曜日になり、その土曜日は部屋から出ずに過ごして今が日曜日の夜になる。

一晩で、腹をくくる。

学校とは俺にとっては日常だ。日常に沿って、規則正しく行動する事こそが刻み込まれた恐怖を過去の物にし、徐々に薄め、いずれは消し去ってくれるに違いない。

だから、問題はその日常への第一歩を踏み出せるかどうかなのだ。

「踏み出せるか、どうか……」

か、どうか。

……うじうじ。

弱気の虫が、うじうじと。

「……あ〟あ〟ーッ！　暗ぇっ！　楽観だ楽観。こんなもん、案ずるより産むが易し的なサムシングだよ絶対。そうでなきゃ困るもん」

気勢を上げる。

心に巣食う陰気を弾き飛ばすようにベッドから飛び上がって、窓を覆うカーテンに近づいて――ジャーっと。

「だいたい環境が悪い。こんな部屋暗くしてお外シャットアウトして、一歩踏み出すもクソもねえじゃん。何やってんだ俺は……」

カーテンに続いて窓も開け放つと風が入って来た。

穏やかな涼風は換気ゼロで若干蒸して来ていた俺の部屋と一緒に俺の心まで洗ってくれるようだ。

そのまま窓から外を見れば、雲一つない夜空に綺麗な月が輝いている。

「よし、そうだな、日常ってんなら飯食わねえと。晩に晩飯食わねえで日常もねえよな」

神器の事、アーシアと話せた事、色々と気になる事は尽きないが、全部後回しにしよう。

まずは今生きている事を喜んで、まずはそれからだ。

ぎゅるるとうなり声を上げ始めた腹をさすりながら――ふと、下を見下ろすと。
「あいつら……？」
親友だった。
ふらふらと、見えないロープで引っ張られるような生気のない歩き方をする、松田と元浜の二人。
我が家に通りがかって、通り過ぎて行って。
その先にある物を想像して。
俺はスマホを引っ掴んで大急ぎで靴を履いて。
家を飛び出す決心をした。

――――

「待てよ……！　待て、おい！　お前らッ！」
身体をぶち当てるようにして扉を開き、どこに行くのかと静止を求める母の声を振り切って。
遠ざかった二人を追いかけて追いついて。
肩を掴んで振り向かせて――振り向かせたその顔は。

「――――――っ」

ゾッとした。

振り向かせたその顔には、有り体に言って生気が無かった。

青ざめて生きているように見えない、という事ではない。

開いた瞳孔、虚ろな眼差し、抜け落ちた表情に、開いているというよりも閉じていないだけの口元。

――生きていない。と、一目で確信した。

何も見えず、何も聞こえない。そうなるように魂を封じ込めて、所有者を失った肉体を遠隔操作（ハッキング）される。

人権、誇り。人の魂の尊厳を何から何まで無視して犯す。まさに、悪魔の所業。

そんな事をする悪魔に、俺は心当たりがあった。

はぐれ悪魔バイサー。

主に歯向かい、これを殺すかあるいは逃げ出した元人間の転生悪魔。

原作では特に見せ場があるわけでもなく、味方ｔｕｅｅｅ描写のためのカカシみたいな扱いで大したキャラ設定も無い。主人公のチュートリアルのための、いわゆる使い捨ての出落ちキャラだった。

だが、バイサーには一つだけ重要な設定があった。

それは、ハイスクールD×Dにおいておそらく唯一の、食人行為の常習者である事。
人を誘き寄せ、喰らう。
まるで誘蛾灯に吸い寄せられるかのように、盲目的に亡者のように、意思無く歩く親友二人の様子を見れば、なるほど、一目瞭然だ。誘き寄せられている。
であれば、食われるのだろう。
――冗談じゃない！
「ふざけんなッ！　んなことさせてたまるかよ……テメェら、さっさと目を覚ましやがれ！」
そうだ、そんなこと許せるわけがない。
憤りを胸に、二人を殴りつけ、押し倒し、力ずくで押さえつける。
だが――
「うお――とま、止まれよおい!?」
止まらない。
空虚なまま、ふらふらと。――重機を思わせる緩慢な怪力で。
俺を払いのけ、拘束を意にも介さず。
まるでゾンビのようだ。
死を恐れず、痛みを感じず、理性を知らず――だからこそ、己が身体の限界を無視し

て、骨肉の崩壊と引き換えに人知を超えた膂力を発揮する。
であれば、ブチブチと引きちぎれるように響くこの音はきっと筋繊維の断裂に違いない。
「どうすりゃ良いんだよ……っ！」
俺がどれだけ力を込めても、二人の速度は変わらない。
ずるずると引きずられるだけで、足手纏いにすらなれず――ああ、もう着いてしまった。
無力感を抱えながら辿り着いてしまった、町外れの廃屋。
はぐれ悪魔バイサーの棲家だ。
「クソが……っ！」
さて、この「町外れの廃屋」だが。
もともと町外れなんて簡潔な説明をされてしまっているが、正確には町外れというよりも立地の悪い閑静な住宅街というほうが正しい。
原作ではただ廃屋としか書かれてはいなかったが、こうして実際に来てみると廃屋というよりも割と綺麗な――というか、周囲の住居よりもいくらか大きめの、ぶっちゃけ城みたいな洋館であった。
だというのに廃屋となっているのはきっと、この一帯の目玉として変に力入れてでっ

かいのを作ってしまったけど集客力に重きを置きすぎて売らなきゃいけない事を忘れてて気付いたときには価格がとんでもない事になってしまい最終的には誰の手に渡る事もなくいつのまにか廃屋みたいになってしまった、とかそんなんだろうなあ、と――。

そういえばこういうのって不動産とかがたまに入って掃除とかして維持するとか聞いたことがあるけど、見るからに埃積もってるし窓から蜘蛛の巣が見えるし、作った会社はもう滅びてるんだろうなあ、と思いつつ。

そうじゃないなら、売る前に魔法とかで一気に綺麗に出来る、悪魔達の会社が作ったに違いない。

とまあ、それはともかくとして。

ひとりでに開かれた扉をくぐって入る二人に俺。

早速出迎えたのは人骨だった。

「――――ひっ」

肋骨であったと思しき、滑らかにカーブした骨。

大腿骨であったと思しき、長く太い骨。

これらはひび割れ、折れて、全体像をうまくつかみ取れないが、一つだけ損傷の少ない骨があった。

頭蓋骨。

学校の理科室にあるような骨格標本と同じそれが、腐敗した肉片をへばりつけたまま痛ましく放置されていた。
これさえなければ何か人間ではない他の動物の骨だと勘違い出来たのに。
「オヤァ……？」
恐怖に肺がこわばって呼吸が変になった俺に、その時声がかけられた。
「ヘンなのがいるなァ……？　お菓子についてくるオマケかな……？」
バイサーだ。
酷く艶かしい、陶酔した女の声。
部屋中に反響するような、奇妙な聞こえ方だった。
どこから喋っているのか分からないせいで、四方八方を囲まれているようにすら感じられる。
「呼んだのは二人だけなのに……大盛りなんて幸運だなァ……？」
ゆっくりとした声。
距離感すら掴めないせいで、遠くから叫ばれているようにも、耳元でささやかれているようにも感じられた。
ちょっとドキドキするのはきっと、興奮ではなく恐怖に違いない。
誰がオマケだこの野郎——と言いたいが、下手に挑発しても死ぬだけだ。

大丈夫、こっちだって策はある。別に相手を撃破するだけが道じゃない。
「お前は……はぐれ悪魔バイサー、だな」
懐から携帯電話を取り出し、通話しているかのように耳に当てながら一歩踏み込み、親友二人の前に出る。
松田と元浜は家に入ってすぐ動かなくなり、その場で立ち尽くすだけだった。
ちょうどいい、すぐに洗脳状態が解けてパニックを起こされるよりはマシだ。
「俺です。はい、情報通りでした」
あたかも通話相手がいるかのように呟き、すぐに携帯をポケットにしまう。
「魔王ルシファー様が妹君、紅髪の滅殺姫（ルイン・プリンセス）と謳われるリアス・グレモリー様の管理する、この駒王町に侵入するとは……知ってか知らずかはともかく、運が無かったな」
あくまで高圧的に、可能な限りの高慢を装って宣言する。
そう、策とは即ち、虎の威を借る狐作戦だ。情けない事だが。
（でも、無力に悔しがるのは今じゃない。今は演じ切るんだ、悪魔の眷属を）
ちらりと振り返って、操られた親友二人を見る。
「貴様の命運もここで尽きる――と、言いたい所だが。ここで事を起こしては民間人を巻き込むか」
チッ、と腹立たしそうな舌打ちも忘れない。

良いぞ俺、今の俺かなり悪魔だよ俺！　この調子で仲間ｔｕｅｅｅ感と俺ｓｕｇｏｏｏｏ感を演出しきればバイサーをここから撤退させられるかもしれん。

「リアス様は慈悲深い方だ、人間を巻き込む事を好まん。二人を解放し、この町を離れるならば……不本意だが、見逃してやろう」

言い切った。

さあここが分水嶺だ、これが上手く行くかで俺の命運の明暗が決まる。

さあ、返答やいかに。

薄暗い洋館の中を沈黙が包んで――。

「……ああ、お芝居は済んだか？」

「クソッたれが！」

ごう、と風を切る音がする。

それも真上から。

第六感、背筋に走る悪寒を信じて身を投げ出すようなダイブでその場から逃げる。

「見てたぞ……？　そこの二人を止めようとして……引きずられて……必死だったな……？」

振り返ると、そこにいたのは四足獣のような巨大な怪物。

まるで薄汚いケンタウロス。肉食獣を思わせる異形の下半身から裸の女の上半身が

生えている。
そんな怪物が二つの長槍を手に、ついさっきまで自分のいた場所を粉砕していた。
「……いい歳して覗きかよ。自重しやがれっての、年増が」
「お前は何だか旨そうだなぁ！」
「話が通じねえし！」
突進を転がるように回避する。
まずは距離を取るのだ。こんな怪物とまともにやり合うなんて論外だ。離れれば何とかなるというわけではないが、近づいたら命が無い。
離れて、太く頑丈そうな円形の柱を背に、その陰に隠れて――あれ、それからどうしよう。
バイサーはそもそもが巨体だ。それはつまりその巨体を実戦的に動かすだけの筋肉がそこに詰まっているという事で、その巨体で人間を追いつめるための戦術を持っているということで。
筋肉というのはゴムみたいなものだ。伸張したり膨張したりして、堅く弾力がある。分厚くなれば鎧と変わらない。
要するに、強いのである。只人が殴ったり蹴ったりしただけでは、ビクともしないくらいには。大きいというのはそもそもその時点で力だ。その上で超常の魔力を持って

いるなんて。
ビキリ、と不吉な音がした。
「――ッ！」
直感に従い、背にした柱から避難する。
直後に発生する亀裂音、破壊音、内部から爆発したかのように散弾が如く飛散する鉄筋の混じったコンクリート片、それらを生み出したバイサーの突進――人間を優に十回は殺害させられるだけの殺意がそこにあった。
「マジかよ……」
飛んで行ったコンクリート片が備え付けの家具を破壊する。
テーブルの脚が圧し折れる。
踏み心地の良い絨毯が引き裂かれる。
高級感溢れる赤いソファには大穴が空き、内部のスポンジのクッションをはみ出させ。
こぼれたクッションの欠片が、人間の内臓を幻視させて。
――恐怖にこみ上げる嘔吐感をそれでも無理矢理飲み込んで。
にぃぃ、と。
破壊衝動の発散によるものか、惰弱な生き物を追いつめる喜悦からか、振り向いたバ

イサーの歪んだ笑顔を睨み還す。
決して。己に何の力も無い、というわけではないのだ。
例えば堕天使レイナーレに目をつけられた事。
レイナーレの目的はあくまで神器持ちの排除であって、無力な一般人を虐殺する事ではないのだから逆説的に俺には何らかの神器が宿っている証拠になりうる。
そしてそのレイナーレを殺した謎の直剣。
これこそ俺の神器の発露にして、力の証明に他ならない！
「つーわけで、来いッ！　俺のセイクリッド・ギアッ！」
故に叫ぶ。
かつて堕天使を斬り殺した直剣を掴み取るようなイメージで開いた右手を前に突き出し、握り込んだ左手は正拳突きの引き手のような位置に。
なるったけ勇壮なポーズで、全力で格好を付けながら、有らん限りの勇気を振り絞って。
神器とは、想いを力に変換する装置であるが故に！
――が。
「……来ねえ!?」
「ここここ滑稽だなぁあはははははははははははは！」

「てめえは来なくて――うおお死ぬ死ぬ死ぬっ！」
神器の代わりにバイサーが来た。
（なんで神器が来ねえんだ!?　あれか、条件付きとかそういうやつか？　レイナーレの時みたいにピンチじゃないと出て来ないとか……今がその大ピンチだよクソが！）
再度の突進。
「うお……クソッ！」
それが連続する。
バイサーの下半身は獣のそれだ。悪魔の筋力、瞬発力を持っている事以上にその構造自体が人間のものよりも遥かに移動に優れている。
しかし肉体の大型化によるものか、単純に技術がないのか、その動きは大雑把で細やかさに欠けていた。
神器も使えない俺がここまで生き延びていられるのは、偏にこれによるものであった……が。
「もぉおおおおおおらぁぁぁぁぁぁぁぁいいいいいいいいいいいいい！」
何度も何度も――人間以上の速度で追いかけ回されて、いつまでも躱せていられる訳が無かった。
とてつもない速度で接近する、殺戮の喜悦に狂った嬌声。

ドスンドスン、と床を粉砕せんとばかりに踏み鳴らされる足音。
崩れた体勢を自覚し、避けられない事を悟る。
不明な理由で出現を拒む神器。
しかし、存在しないわけではない、はずなのだ。
――だから、語り掛ける。
（俺の神器、お前が表に出てくれないのは分かった。でも、だったら俺の内側でくらい働きやがれ！）
この神器に意思があるのか、そんな事は分からない。
分かる事は一つ、神器には想いに応える機能があるという事。
「だったら！　もっと速く疾走れェッ！」
その時、グン、と。
脚が燃える――否、錯覚だ。
怒号の瞬間、一体どこにこんな力があったのかと疑問に思う程の活力が胸の奥から発現し、両の脚に収束して爆ぜる。
視界の全てが溶けたように流れ、極僅かな残像を残して線に変貌し――。
「うおぉぉおお――!?」
当然、そんな世界の速度に俺が適応できるはずもなく。

「――っでェッ!?」

頭部への衝撃、それに遅れてやってくる鈍痛。

辛うじてバイサーの攻撃の回避には成功したものの、体勢の崩れた所から無理に飛び出した事もあり、ろくな着地も出来ずに避けた先に転がっていた壊れた家具に頭をぶつけてしまう。

「……っ、馬鹿な、どこに――!」

バイサーはと言えば突然の超加速に獲物の姿を見失ったのか、俺の姿を探している様子であった。

不意打ちの絶好の機会だが、しかし俺はと言えば脳震盪でも起きたのか全身がふらつく。

風邪で高熱に浮かされたように身体の重さが消え失せ、視界が揺れてまともに立つ事すら難しい。

鈍痛の止まない頭に手を当ててみれば、酷くぬめる。

手のひらには血液がべっとりと付着していた。

「……はは」

「そこかァ!」

思わず笑ってしまう。

これまで平和に、オカルトの関わる事など一切無い、ごく普通の生活をして来たのに。
――して来れたのに。
堕天使には殺されかけて、今はこうやって悪魔に命を狙われている。
〝原作〟が始まったとたんこれである。一体何だって言うんだ。まるで踏んだり蹴ったりだ。
――気に入らない。
「チョロチョロとネズミのように！　目障りだ！　さっさと死ねぇ！」
「ふざけやがれ！　窮鼠猫を噛むだ、お前が死ね！」
べっとりと血に濡れた右手で首に下げた十字架のペンダントトップを握り締める。
決して、これは祈りではない。
握り締めた十字架のペンダントトップを通したひもから引きちぎる。
一矢報いる、その決意のために！
「潰してやる……っ！」
バイサーがその手に握る一対の長槍を振り上げる。
俺の十字架を握るこの手に光が生まれる。
抗う。只それだけを胸に、理不尽への怒りと湧き上がる活力に任せてバイサーの攻撃に立ち向かう。

手に生まれた光は輝きを増し、体積を一瞬で増加させて棒状に変化する。
棒状に変化した光は炸裂するように弾け、十字架を象った鉄槌へと姿を変えた。
「たかが人間の分際でぇッ！」
「見下してんじゃねえ！」
振り下ろされる一対の長槍。
十字槌を握り締めて振り上げる。
バイサーに比べ地力と体格で劣る俺では防御したとしても守りの上から潰されてしまう。
（防ぐんじゃない……打ち勝つんだ！）
狙うは武器破壊。バイサーの長槍は見るからに簡素な物で、ともすれば自作した物のようにも見える。あまり質は良く無さそうで――端的に言って、ボロっちい。
これならば性能が未知数とは言え、曲がりなりにも神器である十字槌の方がいくらかは上等なはずだ。
だから、打ち合った際には、きっと――こちらの方に勝機がある。
ふらつきは、いつの間にか消えていた。
「おおおおッ！」
果たして――勝ったのは俺の十字槌だった。

十字槌を払うように振るい、まずバイサーの右手の長槍が圧し折れる。
勢いを僅かに減じさせた十字槌に力を込め、そのままの軌道で左手の長槍に叩き付ける。
角度的に正面衝突に近かった右手の長槍と違い、真横から叩き付ける事になったからか、あるいは右手の長槍との衝突による減速の所為か。十字槌が左手の長槍を破壊する事は叶わず、その成果は軌道を逸らすだけにとどまった。
だが。
「まだだッ！」
この、胸から湧き上がる活力はまだ、尽きてはいない！
左手の長槍を弾いた十字槌の動きを柄を蹴ることで反転させる。
落ちる十字槌をツバメ返しのように跳ね上げて、頂点に昇ろうとする軌道を力尽くで捩じ曲げる。
ここで勝てなければ死ぬと確信した。
「おらァ！」
「ギャアアアアアアアッ!?」
捩じ曲げた十字槌の軌道をバイサーに向け――直撃させる。
命中したのは胸の中心。クッションとなってしまう柔らかな乳房を避け、胸骨のど真

ん中を強烈に打ち付ける。
バキバキ、と硬質の砕ける音が響く。鉄槌の破壊力、活力のもたらす膂力に悪魔の骨格が限界を迎えてしまったのだ。
ジュウ、と肉の焼けるような音が発生する。十字架の聖性に悪魔の肉体が悲鳴を上げているのだ。
追撃を絶やしてはならないと直感した。
怒りと痛みに絶叫する今でなければ負けるのは自分になる。
「ああッ！」
「アガッ！」
再び振りかぶる時間も惜しかった。
胸骨を粉砕し、陥没した胸元から十字槌を引き抜く事もせず、鉄槌のヘッドをこすりつけるようにそのまま顔面へと移動――顎を搗ち上げる。
槌の勢いのままに活力によって強化された脚力で跳び上がり――視界の外で折れた長槍を捨てていたのか、空手となっていた右手で胸ぐらを掴まれる。
「ガッ……アアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」
「しまっ……！」
バイサーの絶叫が変化する。

悲鳴から咆哮に。
困惑と恐怖のそれから、殺意と憤怒のそれへと。
見れば長槍を握る左腕は弓の弦の如く引き絞られており、今すぐにでも強力な刺突を繰り出す事に何の支障も無い。
だから、今すぐにでもこの振り上げた十字槌を振り下ろすべきなのに。
血の混じって、ごぼごぼと水っぽい音の混じった咆哮の威圧は、俺の動きをほんの僅かに停止させ。
「……ッ！」
「くそ……っ！」
終に息の尽き果てて、尚も止まない咆哮。
もちろんそれは音声にはならず、かすれた喉の震えと、最早空気を取り込む事のない潰れた肺から漏れた死血の滴りでしかないのだが。
しかしそれでも、それは死を目前にした命の、純粋な獣性の発露であった。
肺は潰れ、聖性に灼かれ、既に先を失った悪魔の、言わば悪あがきだった。
引いた左腕は突き出され、突撃する長槍の穂先は俺の心臓へと向かう。
――しかし。
「え……」

どちゃっ、と。

おそらくはバイサーが最も信を置いていたであろう簡素な長槍が、叛旗を翻していた。

俺の心臓に向かうはずの長槍が、簡素であっても悪魔の怪力に振り回されて尚壊れる事の無い程度には頑強なそれが。

足りないリーチは太さを犠牲にして、細長く姿を尖らせて。

あたかも生きた蛇のように捩じ曲がり、まるで稲妻の如く持ち主の頭部を貫いている。

「……え、なん、で――」

理解が及ばなかった。

なぜ相手の武器が一人でに動いて、あまつさえ変形までしているのか。

変形するだけならともかく、それが持ち主を害するなど意味不明だ、道理が通らない。

武器は己を守り、敵を害するための物だ。敵を守って己を害してしまうのではその存在は根底から破綻している。

しかしそんな混乱の中でも物理法則は正常に機能していた。

バイサーの放つ決死の咆哮に、確かに俺の動きは一瞬止まった。

とはいえ、所詮は一瞬。すぐに活力によって増幅されたパワーを以て動き出し、十字

槌は振り下ろされる。
バイサーの武器が異常を起こしたのはその後だった。
一度起こした動きは慣性に従って運動し、障害があるまでは停止する事は無い。
――たかが困惑による思考の停止程度では、決して。
ごしゃっ、と。
結果として、バイサーの頭は完全に破壊されたのだった。
物理的に跡形も無く叩き潰され、砕け散った骨肉の一片にいたるまで余す事無く聖性に灼き払われた
はずだった。
悪魔であるバイサーの魂は浄化され、欠片も残さず無に還る。
バイサーの肉体は命を失った事で一切の力を失い、糸の切れた操り人形のように崩れ落ち、そして見えない炎に灼かれたように急速に炭化してぼろぼろになっていく。
終には骨格さえ露出させて――その骨さえも同様に炭化して、後は同じだ。
バイサーは消滅した。
勝ったのは兵藤一誠、俺だ。
「俺が、勝った」
そう、自分に言い聞かせる。

最早悪魔も堕天使も、俺にとってはただ恐ろしいだけの存在ではない。
兵藤一誠には戦う為の力があり、そしてそれをある程度は自由に行使する事が出来る。
俺はもう、逃げ惑う事しか出来ない無力な一般人ではない、なくなったのだと。
「俺の、勝ちだ！」
精神の昂揚――勝利による興奮か定かではないが、なぜだかとてもいい気分だった。
無性に、身体が熱かった。

流点転換。未知に進む三話

はっ、とする。

不意に、友人二人の事を思い出す。

戦いに集中しすぎて、視界――というか意識の中からすっぽり抜け落ちていたが、もともと俺は彼らを救う為にここに来ていたのだ。

巻き込まれて何か怪我をしてないかとか、途中で催眠状態が解けていたら説明が面倒だなとか、しかしちゃんと解けるのだろうかとか、催眠状態の後遺症とか残らないかとか、いろいろと心配事が出て来たが――。

まあ特に怪我をしてたりする事も無く、催眠状態が解ける事も無く依然として忘我のまま、棒立ちを続けていた。

後遺症などは流石に判断が付かないが、しかしついさっき指示を出していた者が消えたのだから問題ない、と思う。

催眠状態である事を利用して、二人に帰宅するように言う。また明日、学校で会おうぜ、と。

バイサーと同じ事をやっているという事に最低な気分になるが、こんな場所の記憶が

あるよりはましなはずだ。
幸運なことに二人は素直に帰って行ってくれた。
はぐれ悪魔バイサーの消滅した後の事だった。
「……ふうっ」
元浜と松田の二人が廃屋から出て行ってしばらく。
昂った精神が少しだけ、落ち着いた。
必要以上の力が込められた右手をリラックスさせ、そこに握られた十字槌をだらりと下ろす。
マラソンを走り抜けた直後のような、今すぐにでも座り込んでしまいたいくらいのとてつもない疲労感がこの身体を襲っていた。
力の抜けて位置の下がった十字槌の四角いヘッド部分が綺麗な白い石の床をガツ、と削った瞬間。
「おわっ!?」
そこには音も無く椅子が出来ていた。
それは高級感溢れる白い椅子。
背中を預けるのに十分な、というよりも過剰に大きい背もたれもあり、一見玉座のようにも見えて威圧感すら感じるが。

見る限り材料は床の石と同質――というかまるっきり同一の物に見える。椅子の周りの床が大きく凹んでいるあたり、間違い無さそうだ。

「……なるほどな、そういうことか。この、十字槌の能力は――」

そう、間違いない。

――打ち付けた物質の変化、構造と造形の改変。

バイサーの槍の時ももしかしてとは思ったが、他に誰もいないこの場でこんな現象が起これば、信じざるを得ない。

「武器がひとりでに動いて自分を貫く……そんな事には何の意味も無い、不利益だけだ。なら、それが反対にメリットになる、俺の神器が引き起こしたって考えるのが自然だ」

いや、まあ槍がうねうね蠢くとか自然さの欠片も無いけど。

呟きながら十字槌で椅子をコツリと叩く。脳裏に浮かべる物は十字架だ。

すると椅子は火が通る前のパン生地のように形を失い、同じ大きさの十字架に変貌する。

純白の十字架のオブジェクトはシンプルながら荘厳な雰囲気を醸し出しており、売り物にもなりそうに見えるが――。

「まあ、売る相手もいないし、な」

鋳造されたかのようにつるりとした表面は削り出されて作られた事を感じさせず、磨

き上げられる工程を想起させる事も無く、醸し出す雰囲気には若干の違和感がある。こういう所から神器の存在がバレるのだろうか。

十字槌でオブジェクトを撫でるように叩き、床の厚みに還元する。

「椅子が出来たのは多分、俺が疲れて座りたかったからで――明確なイメージが無くても神器の方で補完してくれるのか？　じゃあバイサーの槍については自衛本能と殺意が合わさった結果とかかな……、ある程度の時間差か遠隔操作も出来るっぽい……？」

神器の考察を続けていると己の思考の揺れにでも反応したのか、オブジェクトを還元した床がぐらぐらと波打っている事に気付く。

こんなことも起こるのか、と少し驚きながら、落ち着け。と呟き、波打つ床が落ち着くのを確認する。

――十字槌を見つめる。

「……。」

十字槌が光に包まれる――否、包まれていくのではない、変換されているのだ。

白銀の十字槌が端から解けるように光へ変わり鱗粉のように散って、それを言外に裏付けるように手の中の重みが減少していく。

「――――。」

終い。

十字槌の最後、手の中に残った物は、バイサーとの戦いで頚から引きちぎった物。
つい一昨日のこと、アーシア・アルジェントから受け取った十字架のペンダントトップだった。
「また……助けられたのか」
屋内故の制限された光源の光を白銀に弾くそれを、強く、握り締める。

「お前はロリババアが好きで、俺はのじゃロリが好き！　そこになんの違いもありゃしねぇだろうが！」
「違うのだ！　年齢的に！」
「ははは、ちなみに俺は実のところロリ属性無いんだ。時代はおっぱい、豊かな山脈よ」
翌日、ロリコン（元浜）の言を躱しつつ。あとエロ坊主（松田）の事も流しつつ。
見る限り、謎の筋肉痛に苦しんでいる事以外に二人の様子に変わりは無く。前日の記憶は無いようで、特に心配は要らないだろう。
というかこの世界にキン肉マンなんて無いはずなのだが。オリジナルか。
ともかく、今気にするべきは二人の事ではなく、もっと別の事だ。

「……なんか、ピリピリしてね？」
「なにがだよ？　静電気とかか？」
「学校の雰囲気がだよ。なんか緊張感があるっていうか、背筋が冷たくなるような」
それは学校の異変だった。
空気が張りつめて一触即発、今にも弾け飛んでしまいそう――という訳ではないが、例えば視界の隅、例えば物陰にでも怪物が息を潜めていそうな、ホラーゲームのダンジョンのような物々しさ。
しかし実際には別に、クラスメイト達は特に何も感じていないようで、いつもの喧噪を繰り広げており、様子に変化は見られない。
故に。
「おう、今日も今日とて中二病に翳りは見えない――というか磨きがかかっているな。今回はどんな陰謀が待ち受けているんだ？」
「おら、早くその右目に隠された魔眼の力で謎を暴くんだよ！　イッセー君のー、ちょっといいトコ見てみたいー！」
「話した俺が馬鹿だったよ！」
ご覧の有様だった。
友人二人のバカ騒ぎに、もしかしてこれは気のせいなのではないかとも思えてくるが

――しかし楽観は出来ない。

つい先日死線をくぐり抜け、更にその二日前には文字通り死の淵に立ったばかりなのだ。もしかしたら何か、神器と共に危機を直感的に感じ取る力でも目覚めた可能性がないとは言い切れない。いや、むしろあるべきだ。

もともとこのバトルファンタジー世界では「敵の殺気を読んで攻撃をかわす」みたいな意味不明な芸当をさも当然の権利のように戦術に組み込む強者が腐るほどいるはずなのだからして、謎の神器を宿すこの俺にそんな第六感スキルが目覚めない訳が無い。

（――というか、今のうちにその手のスキルに目覚めておかないとこの先生きのこれないんだよな）

なので。俺はこの異変、謎の気配について自分の感覚を全面的に信じる事にする。

（それに……心当たりがないってわけでもない）

というか、本来平和なはずの駒王学園でこんな緊張感を感じるならば、原因は一つしか無い。

（悪魔、だな）

もともと駒王学園というのは悪魔に深い関わりを持つ組織だ。

所有権が悪魔の名門であるグレモリー家の下にあるし、学園のトップもほとんどが悪魔の関係者によって占められているらしい。俺の知る限り原作に於いてはノータッチ

だったが、もしかしたら教師の何人かは悪魔が務めている可能性もある。
そしてもう一つ。つい先日、俺が倒し――殺した、はぐれ悪魔バイサーの事だ。
バイサーは原作では悪魔の大公から依頼を受けた悪魔リアス・グレモリーとその眷属によって討ち倒されている。
――そう、大公からの依頼によってだ。
悪魔の大公がいつグレモリーに連絡を出したのかは定かではないし、まだ出していない可能性も否定出来ないが、出したという前提で考察すれば筋は通る。
おおまかな流れはこうだ。
――大公から依頼を受けたリアス・グレモリーは早速はぐれ悪魔バイサーを狩りに向かう。
――バイサーの居ると思しき場所に到着するグレモリー一行であったが、時既に遅し。俺が先に殺してしまった為、残るは凄惨な戦闘痕のみであった。
――バイサーははぐれ悪魔だ。はぐれ悪魔とは前提として己を転生させた主を殺す、もしくは主から逃げ果せるだけの力を持ち、決して雑魚ではない。
――そんなバイサーを殺しうる存在が駒王町に隠れている事を悟ったグレモリー一行は、これからの日常で警戒を強め、排除――少なくとも正体を突き止める事を誓うのだった。

――と、こんなところか。
おそらく、もしその正体が兵藤一誠であると既にバレているのであれば、遅くとも放課後には俺に接触してくるはずだ。
ちょっと、考えてみた方が良いかもしれない。

――

そして、放課後。
「……拍子抜け、だな」
一人、帰路に着き、路を歩きながら呟いた。
結局、悪魔は来なかった。
昼休みには焼きそばパンを齧りながら警戒し、授業と授業の合間にも教室のドアをチラチラ見ながらいつ来ても取り乱さないよう心を整えていた。
それでも悪魔は来なかった。
金髪イケメンも、白髪マスコットも、黒髪と赤髪の学園二大お姉様も。――だれ一人として、来る事はなかったです。（オフ会０感）
――まるで自分が自意識過剰野郎みたいじゃないか！

「いや、まあ。いくら優秀だったとしても流石に一日かからずってのは無理ゲーだよな」

それに、よくよく考えてみれば悪魔サイドには俺に関する情報がこれっぽっちも無いはずなのだ。

まず、はぐれ悪魔バイサーの死体が無い事。

実際に殺した実行犯である俺だからこそバイサーが死んだ事を知っているが、行方知れずの者は通常、死体が無ければまずそれは失踪事件として扱われるのだ。

そうでなくとも、ただでさえバイサーは「はぐれ悪魔」なのだ。悪魔の社会に於ける「人権」のようなもの――すくなくとも生命が生命を尊重するという、最低限の倫理の対象範囲外に位置し、それこそ野犬害獣と同等の扱いを受ける、冥界にあって最底辺の存在だ。

数多くの人外に狙われ、見つかり次第殺処分とされ、駆除のために依頼まで出される程に忌み嫌われる命だ。生存の為に居場所を頻繁に変え、西へ東へと寝る間も惜しんで逃亡を続けていたに違いない。

たとえば、そう。

――バイサーは、グレモリーの管理する駒王町で一心地着いた所でたらふく腹ごしらえし、「食べ物」から足が付く事を警戒してすぐに去っていった。

と、そういう風には考えられないだろうか？

ただでさえ俺の神器がバイサーの死体を灰も残さず灼き尽くしてしまったのだ。おまけにその時の俺の武器は鈍器だったため、辺りにバイサーの血液を撒き散らした訳でもない。どこかに有ったかもしれない血痕からＤＮＡでも採取して、痕跡を確かめる事も出来ない。

そう、バイサーと戦った――打ち負かした者の痕跡など、残っている訳が無いのだ。

戦闘痕だってバイサーが一人で勝手に暴れただけとか、そういう考え方も出来るし。

「……そう考えると、むしろ怖がってんのがバカらしくなるな」

発想の転換により、気持ちが落ち着いていく。

結局の所、恐れようが勇もうが結果は変わらないのだから、今の感情には何の意味も無い。

ならば、無駄な思案に時間を取るよりも、せめて最悪の場合に備えるべきだ。

そう思い至ったところで自宅、兵藤家に到着し――通り過ぎる。

通り過ぎて、加速する。

「学校からも遠くなったし、そろそろあっためていくか」

足取りが軽くなった、という訳ではない。

むしろその逆、先に比べて歩みは重くなっている。

正確には馬力が増したのだ。

胸の中心部の最奥、ともすれば背中を突き抜けてしまうのではないかと思えてしまいそうな程に深く遠い。感覚の上ではそのように感じる一点から、湧き起こる活力を肉体に満たす。

荒々しい熱量を吹き込まれた筋繊維は強靭に稼働し――危うく自身の肉体を吹き飛ばしてしまいそうになる。これでは先日のバイサー戦の再現だ。

「っとと……」

そうなっては悪目立ちが過ぎる。事件になってネットの海で人気者になるのはご免被りたい。

慌てて全身から力を抜き、体の跳ね上がりを抑えにかかる。

結果としてグラリ、と体勢を崩し、危うく転倒しかけるが、辛くもバランスを持ち直した。

――脚の運ぶペースを早める。

たんっ、たんっ、たんっ、と。図らずも常よりも比較的長いストライドで走る俺は、まるでランナーになった気分だった。

主観としてはジョギング程度の意識だったのだが、しかし客観視すればランニングに見えるだろう。――自分の力を制御出来ていないのだ。

跳ねるように……と言うと誇張が大きいが。それでも反発係数の高い、スーパーボー

ルが弾むように。風を斬って進みゆく。
……曲がり角には気をつけた方が良いかもしれない。

――――

走って、走って、走って――活力込みの脚力に少しだけ慣れて来た頃。
立ち止まる。
地面はアスファルトから土へ、周囲の物はコンクリートの建物から木々へと姿を変えていた。
むき出しの自然がある。
辺りに人気は無い。
ここは、原作二巻でグレモリー眷属一行がライザー・フェニックスとのレーティングゲームに向けた特訓の場、その拠点となるグレモリー家所有の別荘――があると思しき、山の中。
「疲れは……あんまりないな」
立ち止まった俺がまず始めにした事は、コンディションのチェックだった。
両手両足をぷらぷらと振るい、四肢に違和感の無い事を確認する。

これまた主観ではあるが、異常は特に無し。むしろ良好である。
――が。不調、という訳ではないものの、奇妙な感覚を覚えていた。
まるで生まれ変わったかのような清々しさ。
己の中に有る力を僅かにでも解放できる高揚感。
今なら自分に出来ない事など何も無い、という全能感を確信しながら、それをどこか遠い所から眺めているような、人ごとのような現実感の無さ。
自分を「力に溺れない冷静な男」と取るべきか、「降って湧いた幸運に喜べない冷めた男」と見るべきか、悩みどころである。
「まあ、どっちでも良いか」
何にせよ、気分が乗っているのは確かなのだから悪い事は有るまい。
目的は修練。目標は最低限、自分の持つ力に慣れる事。
好きこそ物の上手なれとも言うし、集中力の有るうちにものにしてしまいたいところだ。
力の総体、はたして俺のような若造に見極められるか……まずは武器の出し方からだな。

――

窓の無い一本道があった。
意図的なまでに明かりの欠如した空間だった。
そこは地下。
もはや人も神も絶えて久しい、埃の積もって寂れた教会の隠し階段の更に奥。
ほんの僅かなロウソクで作られた、刻むような闇で彩られた通路には、小柄な少女が歩いていた。
コツ、コツ、と足音を立てる、ゴシックロリータ風の装いをした少女の向かう先には通路よりも光源の多い広まった空間があり、通路に仄かな光を差し込んでいた。
「……ミッテルトか」
低い声が掛かる。
広まった空間――祭壇の設けられた広間に入り、少女の視界の明度がガラリと変わった瞬間の事だった。
「レイナーレの行方が分かったってのは本当っすか。――ドーナシーク」
「……」
返す言葉は返事ではなく。
ミッテルトと呼ばれた金髪の少女の、暗い声音の無愛想な言葉に、紺色のコートを着

た男性――ドーナシークは答えなかった。
通路から入って来たミッテルトを迎えるような形で設置されている祭壇の方を向いたまま――つまりミッテルトに背を向けたまま。
振り向く事無く。
まるで何かを躊躇うように。
「ドーナシーク……？」
「……ああ。レイナーレの行方は分かった」
そう言って振り返るドーナシーク。
ようやく見えた表情は何か堪えるような――その時、ミッテルトはドーナシークの手に何かが有る事に気付く。
それは広間の薄暗さに紛れるような黒。指と指の間に挟むような持ち方はその何かが軽量であることを推測させ。そのシルエットはミッテルトら、堕天使にとって否応なしの不吉をイメージさせる。
「レイナーレは――――もう居ない。どこにもな」
今際の羽。
堕天使がその命を散らす時、その末期に残す羽の事だ。
堕天使はその種族に共通する特性として、個々人の羽を完全に見分けるという共感覚

とでも言うべき能力が備わっていた。
　ドーナシークの持つそれはあまりにもボロボロで、全体が黒く焼け焦げており、先端から根への半ばまでは炭化すらしているという有様だったが――それでも、ミッテルトはその正体を見抜いた。
　見抜いて、――――拒絶した。
「嘘っ……っすよね」
「これが嘘に見えるなら。俺はお前の正気を疑うぞ、ミッテルト」
　しかし、ドーナシークはその欺瞞を許さない。
「十中八九、殺ったのは悪魔共だろう。この土地に居るのはグレモリーにシトリー……両方とも現魔王の妹だ、勝ち目は無い」
「嘘っすよ！」
　だが、ミッテルトとて、突っ張ることをやめなかった。
　ミッテルトにとって、レイナーレはただの仲間ではない。
　互いに下級の堕天使として生きて来た者同士、長く苦楽を共に、多くの死線を共に越えた仲だ。
　仲間というよりは家族、戦友というよりも姉妹と言うべき仲だ。
　命を共有したことも一度や二度ではない、文字通りの運命共同体。相手の死ぬ時は自

分の死ぬ時と思っていた。

だから、レイナーレの死は、まさしく半身をもがれたようで――。

「だってそんなの、うちらは百も承知の筈だったじゃないっすか！　確かに、あいつら上級悪魔にはうちらみたいな下級堕天使如きじゃ勝てないっすよ！　でも――」

「上級悪魔といえど、所詮は平和ボケした貴族のお嬢様。我ら堕天使が本気で気配を隠せば感付かれる等あり得ない、か？」

「……そーっすよ」

「なるほど、その通りだ。グレモリーもシトリーも家柄は大層な物だが、しかし実戦経験には乏しい。――ならばこの羽はどう説明する？」

「……」

言葉を失う。

ドーナシークの説明は最終的なもので、まず結果ありきでのものだ。

まず証拠があり、まず事実があり――感情、希望、楽観に浸った論では相対もできずにくじけてしまう。

「レイナーレは死んだ。これは事実だ、覆せない。その上で聞こう。お前はこれからどうするつもりだ？」

「どうするって……」

「仇討ちに向かって無駄死にするか？　虫のように隠れ潜むか？　尻尾を巻いて逃げ去るか？　我々のこの行動は非公式なうえ非公認だ。援軍は望めんし、手駒のはぐれエクソシスト共は小粒で使い物にならん」

しかし、ここでミッテルトは違和感を覚える。

発言に妙な迂遠さを感じる。

問題の提起というよりはむしろ行動の抑止のようで、核心を突くための前振りのようなものか。

しかし、ミッテルトの知るドーナシークは、このように遠回しな物言いをしただろうか――？

「何が言いたいんすか」

「禍の団というものを知っているか？」